

日韓ワールドカップの思い出 (その2)

鈴木将史

前稿では、2002年日韓ワールドカップグループリーグドイツーサウジアラビア戦が札幌ドームで繰り広げられていた6月1日晚(日本時間)、新学長のお供をしてドイツ・オーストリアの提携校に挨拶するべく、機中の人となり、8-0の大勝利の報と共にフランクフルト空港に到着した段までを記した。

この試合では、WMデビューとなったミロスラフ・クローゼがハットトリック(一人で一試合3点以上得点すること)を達成し、一躍ドイツのエースとして脚光を浴びたのだが、最終的に彼はWM4大会に出場し、計16ゴールを決め、現在も通算得点王の地位に君臨し続けている。それもこれも、ひとえにこの札幌での対サウジアラビア戦が起爆剤となったものだった。彼が破るまでの通算得点記録はブラジルのロナウドが保持していたが、ロナウドが得点王になれたのも、2006年ドイツWMグループリーグでの対日本戦2得点が大きい。次戦で彼は更に1得点を加え、それまでの得点王だったドイツの「爆撃機」ゲルト・ミュラーの座を奪うのである。このように、クローゼにせよ、ロナウドにせよ、最近の得点王は不思議と日本に縁があるようである。気になるのは、札幌ドーム内通路には「メモリアルコーナー」と銘打ったショーウィンドウがあり、過去の記念すべき試合での選手着用ユニホームやボールなどを誇らしげに展示しているのだが、WMイングランドーアルゼンチン戦やキリンチャレンジカップや、東京2020や、ラグビーワールドカップなどのユニホーム展示はあるものの、何故かドイツーサウジ戦の展示物は一切見当たらない。場内からドイツチームが戦った痕跡が跡形もなく消えてしまっているのは些か残念である。

さて、フランクフルトに午後4時半頃到着した私たちは、その日の夕べをどう過ごそうかと算段した。普通なら、まあホテル近くのレストランでビールでも飲みながら早い夕食を頂くか、というのが定番だろうが、ここはドイツである。日本では滅多に味わえないドイツの娯楽といえば、やはりオペラであろう。フランクフルトにも立派なオペラハウス „Oper Frankfurt“ があるわけだが、些か無料な近代建築であり、一方、古色豊かな „Alte Oper“ では、もはやオペラが上演されていないというのも妙な話である。そこで、オペラハウスに行き、当日の演目を見てみると、何とモーツァルトの「魔笛」を上演するというではないか。定番中の定番オペラである「魔笛」を見ない手はない、と、私たちは欣然として Abendkasse で入場券を買い求め、平土間席に身を落ち着けたのだった。ただ、12時間弱の長旅の末にたどり着いた歌劇場の客席に、睡魔が忍び寄るのは造作もないことである(大

体学長には大吟醸酒の酔いがまだ残っていた(その1参照)。程なく私たちは深く眠り込んでしまい、舞台上に繰り広げられた歌芝居について、今では何一つ覚えていない。

鼾こそかいてはいなかったのだろうが、私たちが眠りから呼び起こされたのは、オペラが終わり、幕が閉じ、拍手と共にカーテンコールが始まった時だった。歌など全く聴いていなかった歌手たちが、次々と舞台上に現れ喝采を受ける。そのいつもの光景を、寝起きの私たちはぼんやりと下から眺めていたのだが、その時、普段のカーテンコールとは異なる、異様なシーンが現出した。

皆様もご存じのとおり、「魔笛」には「3人の童子」というタミーノやパミーナを導く子供たちが登場する。例えばウィーン国立歌劇場では、この役をウィーン少年合唱団が務めるわけだが、当然その日も童子たちは登場し、カーテンコールを受ける段になった。(日本では労働基準法の関係で、子供たちは「深夜労働」である午後9時以降のカーテンコールを受けることはできないだろう。)ここで3人が幕間から登場したわけだが、彼らは何やら大きなプラカードを携えている。そしてそこにはマジックで「8:0」と大書されていたのだ。その瞬間、劇場内は割れんばかりの拍手に包まれ、オペラハウスでは付き物の「ブラボー！」が、聞いたこともないほどに場内至る所から響いたのであった。このブラボーには、音楽的な感動ではなく、スポーツのもたらす熱狂の気配がありありと感じられたが、客席がこれほど沸いた時間を、私は他にはひとつしか知らない。(もうひとつは、35年ほど前の Faschingsdienstag にバイエルン州立歌劇場で目撃したカルロス・クライバー指揮「こうもり」第3幕である。この時、クライバーはボリス・ベッカーよろしくテニス選手に変装して指揮台に現れ、ラケットで指揮をした。)

その後、私たちはウィーン、パイロイト、ベルリンの提携校を順次訪問し、挨拶がてら新たな学生交換協定の協議等も行い、唐突に記者会見などをやらされて冷や汗をかいたりもしたが、懇談の冒頭は常にワールドカップの話題から入ったので、極めて円滑で愉快な話し合いを持つことができた。加えてドイツがすこぶる好調であったせいで(最終的には決勝まで駒を進めた)、最後までサッカーの話題は尽きなかった。蓋し、先のオペラハウスでの一件や、大学訪問時の懇談でも明らかのように、ドイツでは、クラシック音楽ファンや研究者などと、スポーツファンが我が国よりもはるかに高い割合でオーバーラップしている感がある。日本のコンサート常連客が、サッカーや野球に対してこれほど熱狂するだろうか。ベルリン・フィルの団員たちからなる草サッカーチームがあるというし、クラシック音楽にせよ、サッカーや野球にせよ、我が国にとっては外来文化なのだが、受容層がまだまだ分化している日本に較べ、こうした文化を国全体で包括的に受容しているドイツの懐の深さを、改めて垣間見た道行きであった。

プロサッカーの試合では、選手たちが「エスコートキッズ」と呼ばれる子供たちの手を引いてピッチに現れるが、日韓ワールドカップ札幌大会でもエスコートキッズが札幌と近隣自治体で公募された。この公募にはチーム単位で応募がなされたのだが、私の家の近くにあって（石原裕次郎・慎太郎兄弟の母校である）小学校を母体とするサッカーチームが応募したところ、何たる強運か当選し、それもイングランドチームのエスコートキッズを務めることになった。私はこのイングランドーアルゼンチン戦をベルリンのホテルで見たのだが、自宅の前の駐車場でよく遊んでいた見覚えのある子が、ベッカムに手を引かれて入場してくる様子を眺めながら、何やら不思議な感覚に襲われていた。その子は翌日、「ベッカムとつないだ手、まだ洗ってないよ」と言って、校長先生と握手をしに、校長室まで来たそうである。

（小樽商科大学教授）